

「デター派（統一指導部）」の経過は低減している。武蔵氏は代々木の解隊を半ば期待していたであろうが、細野（党員）ら代々木の動きと距離を置いていたようである。

当夜キャンパスには、日共民青の「実力解除」に反対する一般学生・体育会系学生が約五百人、小雨の降る中でたき火を囲みながら武力衝突回避に迫っていた。（彼らは「たき火組」と呼ばれ、中川会館封鎖以来連日徹夜で武力衝突回避を訴え、激動の一カ月を終始リードし、立命館民主主義の最後の審判人であるとともに、のち、学部編委に合流し、全共闘の主力となる。）

午後一時半、中川会館の電気が切断されると同時に、黄色のヘルメット・緑の盾で完全武装した日共民青行動隊（京都においては、学生その他に地区同盟員が多数ヘルメットに参加している）約五〇〇名が、彼らの拠点としている研心館から現われ、地下道から実力解除に向う一方、存心館からは放水・投石・バルサン等から攻撃してきた。

中川会館の占拠を断絶するため、寮連合、全共闘はその総力をあけて、代々木の解隊攻撃に備えたが、孤立した建物に二百人あまりがたてこもるといふ不利はくつがえしがたかった。キャンパスで、より低い三階建の会館を屈服するように、存心館、研心館があり、代々木は、さきめて警備なビッチング・マシンによって、中川会館屋上の投石部隊をほぼ完全に沈黙させ、北側から、バリケードの排除にまったく無抵抗のうちに、手をつけはじめた。

寮連合・全共闘のリーダーも、制空権を奪われ、その物量作戦によって、解隊が時間の問題であることを理解し、敗北を覚悟した。一階の北側が破られ、民青は、バルサン収めで、我々を苦しめ、民青の一階への突入がはじまる危機を我々は感じた。一階を失えば……という孤立の焦り、緊張で、我々はうちふるえた。

この、バリケードの内部で、必死な抵抗が継続されているとき、パナソニックの外のキャンパスで、それに呼応する行動が、もつと劣悪な条件で開始されていたのである。徹夜のたきび組は、これまでのように、事態を客観的に判断しようとするのではなく、その混沌に自らを投げ入れる。体育会に結集する部分とともに、彼らは、素手で、武装民青行動隊の突撃の前にすわりこみ、立ちどまり、ま冬の寒夜、民青がもちだした放水にひるむことなく、敢然と、たちあがった。ラジオの臨時ニュースで急を聞き、かけつけた学友とともに、四百人をこえる人々は一見ばらばらで、整然と隊列を組んでいく代々木に立ちむかっていたのである。おそろく、動員された同盟員とその同調者はこの動きに、びっくりして自分の行動に疑いをいだかざるをえなかったであろう。中川会館占拠派にとどめをさそうとする正面バリケード陣線の作業は中断されたばかりか代々木の行動隊は、つぎからつぎへと武装を解かれ、隊列から離れ、あつさりする。正面からの攻撃が不発に終わると、攻撃は一担、中断した。

しばらくして、正面から大部隊で代々木は突撃をはじめた。代々木は今度は、存心館の前にきずかれたバリケードにはばまれたのである。この際、先頭（おそらく、他大学と地区民青）集団は機軸を選手の手友の頭上にうしろしたがるが、たちまち、彼らにつつまれ、なすすべもなく隊列を分断され、武装を解かれる。代々木はついに、午前二時前、全ての行動計画を放棄し、占拠の排除を断念した。

中川会館の正面バリケードに飾られてあった黄色いヘルメットはこの日の出来事を象徴していた。

代々木の、武力路線の思わぬ失敗は、理事会内部の武蔵の宮廷「デター」を、実力で補完し拡大補導委員会などに急速に台頭しはじめた平和解決派（乾氏の努力をうけて）を打倒しようとする奸計を破産させたばかりか、キャンパスでくりひろげられた一連の出来事をして大学の無血革命の才一歩たらしめる。

一貫して我々に対して「暴力集団」なる中傷を浴びせてきた日共民青が、過去のボーズをなぐり捨てて、自己の持つ暴力性をは

つきりと大衆の前に登場させたことを現わしているし、さらに、大学理事会が、一方で寮連合との大衆団交に応ずるというボーズを示しながら、実は二三日の大衆団交に姿を現わさなかった事実から明らかなように、当夜の日共民青の実力解除に最大の期待をかけていたこと、その「暴力」を抑圧することができなかったことを示している。口を開けば「話し合い」を叫び、「立命館民主主義の発展」を叫んできた彼らが、自らの手で立命館民主主義の「破産」を宣告したのである。

二三日、「平和と民主主義」をこよなく愛する教職組は代々木の暴挙とデターを非難しなかった。「新聞社事件」とはちがってこれらの事実から、我々は「バリケード」の持つ重要な意味をさらに一つ引き出すことができる。すなわち、どこからみても「不合理」であるバリケードが、実は、それを不合理と叫ぶ人間どもの、とりわけ日共民青の自己の持つ「不合理性」「暴力性」を引き出したことであり、そしてそれは、まさに不機嫌なバリケードによってしか引き出し得なかったことである。一見合理的で平和な市民社会を支える権力が、一担「不合理」と見なしたものに對しては自己の暴力性（不合理）をむき出しにしていることは、国家権力・機動隊の、全国の諸君に加えてはいる暴力を見ても明らかである。

六八年の民青全学連大会で「戦闘的學生運動」の推進を宣言した彼らは、敵権力に對してではなく、我々新左翼に對して敵對し、東大・京大・法政大等々で「武装闘争」を行ってきたばかりか、東大においてみられるとおり、敵権力・大学管理者と「三位一体」になつて我々の闘争を妨害し破壊してきたのであり、立命館においてもその例外ではなかった。

彼ら大学執行部と日共民青の公然たる「暴力的敵對」に對して多数の学友は「立命館民主主義」の幻滅を投げ捨て、寮連合・全共闘（準）の旗の下にはつきりと結集する。体制の内部からの暴力に何の阻止ももたない立命館体制の終えんは体制を支える権力機構を瓦解させる。この日以後、誰も「平和と民主主義」を語らなくなった。

次に、我々が偶然手に入れることのできた秘密のメモを公開する。

（資料） （秘）

一月二二日

民青・五者共闘の実力封鎖解除の物質的保障の内容は以下の通りである。

ベニヤ板（二二ミリ）新品一〇〇枚
古品 四八枚

清水建設衣笠現場より借用

コンクリート用パネル 古二五枚

山本工業より借用

有刺鉄線 一卷 鶴茂金物店より購入

三巻 永井金物店より購入

以上の資料とその他若干の物を本部として購入することを決定。武蔵本部長の指示で、管理課を含めて相談し、発注。（午後〇時三〇分購入、一時三〇分物品入手）

一月二三日、二二日深夜の拡大補導主事会議で寮連合と理事会との大衆団交を開くことが確認され（当日は理事会団交を要求する寮連合の最後通告のタイム・リミット）約二〇〇〇名の学友が一二時に登校したにもかかわらず、理事会は姿を見せず、抗議集会へ。